様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ０１１９０

研究課題名（和文）クック諸島プカプカ人の移民コミュニティにみるインターアイランド・ネットワーク

研究課題名（英文）Inter-island Networking of the Pukapuka Atoll Communities: A Study by Multi-sited Approach

研究代表者
深山　直子（Fukayama, Naoko）

東京都立大学・人文科学研究科・准教授

研究者番号：９０５８８４５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：　クック諸島・ラロトンガ島とNZ・オークランドにおけるプカプカ環礁からの移民コミュニティに焦点を当て、その歴史と組織化の経緯を捉え、平常時における互助を主たる目的とした特徴を明らかにした。その上で、固有の言語や伝統芸能といった文化継承や、2005年に環礁社会を襲った巨大サイクロン災害からの復興支援に着目し、移民コミュニティの機能を指摘した。現代においてプカプカ人の生活世界のレジリエンスは、先行研究から導かれるプカプカ環礁社会における資源管理・利用システムの柔軟性・緻密性のみならず、環礁社会と複数の移民コミュニティを繋ぐインターアイランド・ネットワークにも所在するものとして捉えられるべきだ。

研究成果の学術的意義や社会的意義
狭小性とヴァルネラビリティに特徴付けられる傾向の強い環礁社会を、マルチサイテッド・フィールドワークという方法により、インターアイランド・ネットワークという視点から捉え直し、脱領域的でレジリエントな社会として論じる点で、学術的意義が高い。加えて、環礁社会の住民による複数地域への移住を、気候変動が深刻化する現代における主体的な戦略として提示することで、国際社会および各国におけるリスク・マネジメントに関する施策に対して直接に寄与できる点で、社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　Focusing on the immigrant communities from Pukapuka Atoll in Rarotonga, Cook Islands and Auckland, NZ, this study captured the history and organization of these communities and clarified their characteristics of the main objective of mutual aid in normal times. This study then pointed out the functions of immigrant communities, paying attention to cultural transmission such as their own language and performing arts, as well as reconstruction assistance following the massive cyclone disaster that hit the atoll society in 2005. The resilience of the Pukapukan lifeworld in the contemporary era should be discussed not only in terms of the flexibility and precision of resource management and use system in Pukapuka Atoll society as derived from previous studies, but also in terms of the inter-island network connecting atoll society and multiple migrant communities.

研究分野：社会人類学

キーワード：クック諸島・プカプカ環礁　NZ・オークランド　移民コミュニティ　社会組織　インターアイランド・ネットワーク　レジリエンス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

オセアニアでは 1960 年以降、脱植民地化と国家・自治政府を形成する動きが進む一方で、産業の未発達や人口の増加等の原因により、住民がニュージーランド、オーストラリア、アメリカの都市へ移住する動きが顕著となった。それを受けて 1970 年代以降、太平洋島嶼系移民、とりわけその先鞭をつけ移民人口規模も大きいポリネシア系住民の移住に関して、研究が蓄積されてきた。そのなかで、ヒトに加えてカネ・モノ・情報が双方向的に移動することが指摘され、故郷の文化変容や移住先でのコミュニティ形成等が明らかにされている。一方で、太平洋島嶼とりわけ小島嶼を環境・経済・社会的リスクに特徴付けられる現代「リスク社会」のなかで論じる際に、故郷と複数にわたる移住先の間のネットワークを捉えた上で、移住を住民にとって民族存続のための戦略とする視点には欠ける。

このような問題意識の上で、本研究はポリネシアの多島国家クック諸島の北部離島、プカプカ環礁に注目し、プカプカ人移民コミュニティを調査対象とした。プカプカ環礁は陸域面積約 1 ㎢、人口約 500 人で極小島と呼ぶにふさわしい。都市を擁するクック諸島の主島ラロトンガ島からは 1100㎞離れており、年数回来島する貨客船が不定期ながらも環礁と他島を繋ぐ唯一の手段になっている。その辺境性・隔絶性から、現在に至るまで言語や文化、社会構造の固有性が際立つ。また、地方自治政府のもとで相当程度自治が行われており、食糧その他資源の自給自足率も高い。従ってプカプカ環礁社会は、他の小島嶼社会に比して安定してきたと捉えられるが、1970 年代以降は、プカプカ人とりわけその若年層の間でも、環礁外ひいては国外の都市へ移住する人口が増加した。その大半はまず、ラロトンガ島に滞在する。そのままラロトンガ島に居住し続ける者もいれば、さらにニュージーランドのオークランドやウェリントン、オーストラリアのブリスベンやウロンゴン等に連鎖移住する者もいる。プカプカ人移民人口は島内の 10 倍を上回る 6000 人程度と言われている。

２．研究の目的

本研究は、クック諸島・ラロトンガ島と NZ・オークランドにおける、2 つのプカプカ人移民コミュニティに焦点を当て、両コミュニティと故郷のプカプカ環礁社会との関係性を描き出すことを通じて、リスク社会におけるレジリエンスの所在としてのインターアイランド・ネットワークを考察することを、その目的とした。この過程で特に、〈A〉ラロトンガ島およびオークランドの移民コミュニティの歴史と組織化の経緯、〈B〉ラロトンガ島およびオークランドの移民コミュニティの平常時における特徴、〈C〉プカプカ固有の文化継承と環礁社会の災害復興におけるインターアイランド・ネットワークの機能、の解明を重視した。

３．研究の方法

本研究では、ラロトンガ島とオークランドを対象とした現地調査、日本国内においては既得の現地調査データ分析、文献調査および研究会の実施を主たる方法とした。現地調査に関しては、〈A〉〈B〉〈C〉について、コミュニティの活動拠点における参与観察と有識者への聞き取り調査を実施することにした。

４．研究成果

2019 年末に開始したコロナ禍により、1・2 年目は現地調査が不可能になった。その間には、既得の現地調査データ、先行研究、新聞記事、インターネット上のデータ等の精査を行った。結果として、プカプカ環礁社会においては、日常生活において限られた資源を持続的に利用するために、環礁全体、村落、村落下位集団、親族集団、墓域共有集団といった多元的な社会集団の存在に特徴付けられる社会構造に基づいて、柔軟かつ緻密な資源管理・利用がなされてきたことを確認した。さらに、2005 年に巨大サイクロンによって資源と居住空間が甚大な被害を受けた非日常時には、そのような多元的な社会集団あるいはそれに基づく関係性が、応急対応、復旧・復興というプロセスにおいて機能したことにより、住民は支援物資・資金を活用しながらも、環礁に留まり混乱を最小限に抑えて生活し続けることが可能になったと分析した。

2・3 年目は、現地調査を、コロナ禍の余波で限られた形ではあったが実施した。〈A〉については、1920 年代以降のプカプカ人の移住の動向と移住先での展開を捉え、特に移民人口が急増した 1970 年代以降の歴史に関しては、各移民コミュニティにおけるリーダーの選出、活動拠点の獲得、法人化、分裂、世代の交代といった重要な出来事を中心に把握した。〈B〉については、各移民コミュニティの組織的特徴を捉えて環礁社会との同異点を明らかにすると同時に、交流集会、宗教的集会、小規模ビジネスといった活動内容と、環礁社会および他移民コミュニティとの人的交流を確認した。〈C〉については、各移民コミュニティにおいて、環礁社会との人的交流やインターネットを介した交流に基づき、都市で地理的に隣接するラロトンガ人や NZ マオリ等の

他民族にも影響を受けながら、固有の言語や伝統芸能の継承活動が行われていることを捉えた。さらに、2005 年に環礁社会を襲った巨大サイクロン災害の際には、応急対応という段階のみならず、復旧・復興という長期的プロセスにおいて、物資・資金の収集・送付や環礁からの移住者の受け入れなどによって、重要な役割を果たしたことを明らかにした。その際には、ラロトンガ島の移民コミュニティこそがハブになったことも確認した。

コロナ禍により、本研究の遂行は困難を極め、各移民コミュニティに関する現地調査が十分に実施できたとはいえない。しかしながら、プカプカ人のインターアイランド・ネットワークの実態の一端は解明できた。すなわち、現代においてプカプカ人の生活世界のレジリエンスは、資源管理・利用の柔軟性・緻密性といったプカプカ環礁社会自体の特徴のみならず、文化継承や災害復興において確かに機能する環礁社会と移民コミュニティを繋ぐインターアイランド・ネットワークにも、所在すると捉えるべきである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 深山直子	４．巻 519-2
２．論文標題 コロナ禍におけるフィールドワーク実習の継続――オンラインでの試みの記録と学生レポート選集	５．発行年 2022年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 75-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 深山直子	４．巻 86(2)
２．論文標題 〔書評〕栗田梨津子著『多文化国家オーストラリアの都市先住民―アイデンティティの支配に対する交渉と抵抗』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 330-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.86.2_f1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 棚橋訓	４．巻 2020年10月号（No.1248）
２．論文標題 島社会に脆さと強さを想う	５．発行年 2020年
３．雑誌名 三田評論	６．最初と最後の頁 9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 深山直子	４．巻 517-2
２．論文標題 身近な言葉をきく―2020年度「社会人類学演習Ⅱ」のインタビュー作品	５．発行年 2021年
３．雑誌名 人文学報	６．最初と最後の頁 51-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 深山直子	4．巻 88-3
2．論文標題 COVID-19パンデミックへのマオリの対応に関する覚書	5．発行年 2021年
3．雑誌名 経済志林―山本真鳥教授退職記念号	6．最初と最後の頁 243-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計21件（うち招待講演　5件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 深山直子
2．発表標題 三田からオセアニアへ漕ぎ出す
3．学会等名 2022年度民考三田会講演会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 深山直子
2．発表標題 NZマオリはCOVID-19をどのように経験したのか――ウェブ情報から考える先住的レジリエンス
3．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「先住民と情報化する社会の関わり」(代表:近藤祉秋)（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 深山直子
2．発表標題 ニュージーランドにおけるミックス・マオリの所在――センサス、先住民政治、そして若者たちの語りから
3．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「ミックスをめぐる帰属と差異化の比較民族誌――オセアニアの先住民を中心に」(代表:山内由里子)
4．発表年 2022年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 アオテアロア・ニュージーランドの先住民族マオリの漁業権
３．学会等名 中央大学社会科学研究所公開研究会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 ニュージーランド博物館テ・パパ・トンガレワの歴史と現在
３．学会等名 科研・挑戦的研究（萌芽）・20K20746「国公立博物館における先住民族の権利実現の可能性と課題－アイヌとマオリの比較研究」研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 田沼幸子・深山直子
２．発表標題 パンデミックにおけるフィールドワーク演習の挑戦
３．学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会カルチュラル・タイフーン2021金沢大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 COVID-19とNZ政府方針へのマオリの対応－ウェブ情報から垣間見る
３．学会等名 第2回『先住民とCOVID-19』オンライン勉強会
４．発表年 2021年

１．発表者名 FUKAYAMA, Naoko
２．発表標題 Sharing vulnerability: Considering the atoll "islandscape" with a focus on contrasting taro patches in Pukapuka of the Cook Islands
３．学会等名 The Royal Anthropological Institute Conference 2020: Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 TANAHASHI, Satoshi
２．発表標題 Cemetery Assignments and Confluent Trajectories in Life: A Study on the Generative Aspect of a Cemeteryscape on the Pukapuka Atoll, Northern Cook Islands
３．学会等名 The Royal Anthropological Institute Conference 2020: Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 脆弱性の分有―プカプカ環礁州島のタロイモ水田にみるサイクロンの「しのぎかた」
３．学会等名 日本サンゴ礁学会第23回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 人類学的な定点観察に向けたオンライン実習の試み
３．学会等名 TMUフィールドワークリサーチラボ公開ワークショップ『新型コロナ時代におけるフィールドワークのいま、そしてこれから』
４．発表年 2021年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 NZマオリによるラーフイの宣言－コロナ警戒下での先住的環境思想の「拡大」
３．学会等名 日本オセアニア学会第38回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 棚橋訓
２．発表標題 墓が拓く、墓が結ぶ―クック諸島プカプカ環礁のislandscape
３．学会等名 日本オセアニア学会第38回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 マオリによる国連およびUNDRIPの利用―イフマータオの土地紛争の事例から
３．学会等名 科研費「先住民族の権利に関する国連宣言の実効性－先住民族・国家・国際機関への影響」（基盤B・18H00810・代表：小坂田裕子）2020年度第4回研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 先住民と研究倫理――アオテアロア・ニュージーランドの場合
３．学会等名 日本文化人類学会第4回倫理委員会特別シンポジウム「文化人類学（者）の引き受ける責任／変化の可能性」（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 先住民からみるアオテアロア・ニュージーランドと日本
３．学会等名 日本ニュージーランド学会第30回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 FUKAYAMA, Naoko
２．発表標題 “Recutting” and reorganizing the atoll islands: Embedded resilience to the natural disaster of Pukapuka
３．学会等名 19th IUAES-WAU World Anthropology Congress 2021（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 寺内大左，小坂田裕子，深山直子
２．発表標題 開発に直面する先住民族の協議・ FPICに関する国際 比較研究プロジェクトの構想
３．学会等名 国際開発学会第34回全国大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 国際人権法学×社会人類学――ニュージーランドから考える（シンポジウム「『考えてみよう 先住民族と法』にみる 学際的研究の可能性と課題）
３．学会等名 国際人権法学会 第35回（2023年度）研究大会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 深山直子
２．発表標題 ポリネシアの極リモート環礁における島嶼間ネットワークとアイデンティティ
３．学会等名 2023年度海域アジア・オセアニア研究（MAPS）国際シンポジウム・全体会議「移住とアイデンティティ」
４．発表年 2023年

１．発表者名 TANAHASHI, Satoshi, FUKAYAMA, Naoko, YAMACUHI, Toru
２．発表標題 Surviving environmental crises: Meteorological disasters and life strategies in the enduring Pukapuka Atoll society
３．学会等名 日本地球惑星科学連合2024年大会
４．発表年 2024年

〔図書〕　計9件

１．著者名 小坂田裕子・深山直子・丸山淳子・守谷賢輔（編）、深山直子ほか（著）	４．発行年 2022年
２．出版社 信山社	５．総ページ数 246
３．書名 考えてみよう先住民族と法	

１．著者名 中野 聡・安村直己（編）、棚橋訓・深山直子ほか（著）	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 -
３．書名 岩波講座世界歴史第19巻太平洋海域世界～20世紀	

1．著者名 大村敬一（編）、大村敬一・深山直子ほか（著）	4．発行年 2023年
2．出版社 以文社	5．総ページ数 -
3．書名 文化人類学の最前線――「人新世」時代を生き抜く	

1．著者名 須藤健一・山本真鳥（編集顧問）、棚橋訓・深山直子ほか（著）	4．発行年 2023年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 -
3．書名 オセアニア文化事典	

1．著者名 川田牧人・松田素二（編）、深山直子ほか（著）	4．発行年 2023年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 -
3．書名 世界の冠婚葬祭事典	

1．著者名 小野林太郎・大橋順・古澤拓郎・小谷真吾・塚原高広・馬場淳・里見龍樹・河野正治・深川宏樹・石森大知・渡辺文・桑原牧子・深山直子・丹羽典生・福井栄二郎・石森智・田所聖志・小林誠	4．発行年 2020年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 304
3．書名 オセアニアで学ぶ人類学	

１．著者名 中野聡、安村直己（編）、棚橋訓、後藤明、風間計博、藤川隆男、矢口祐人、深山直子ほか	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 306
３．書名 岩波講座世界歴史第19巻　太平洋海域世界　～20世紀	

１．著者名 大村敬一、深山直子、飯田卓、森田敦郎、中川理、モハーチ ゲルゲイ、木村周平、久保明教、中谷和人、土井清美、入來篤史、河合香吏	４．発行年 2023年
２．出版社 以文社	５．総ページ数 464
３．書名 「人新世」時代の文化人類学の挑戦	

１．著者名 川田牧人、松田素二（編）、深山直子ほか	４．発行年 2023年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 432
３．書名 世界の冠婚葬祭事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	棚橋　訓 (TANAHASHI Satoshi) (50217098)	お茶の水女子大学・基幹研究院・教授 (12611)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関